

## ‘呪われた血’の叛逆詩人(2)

George Gordon Byron

楠 本 哲 夫

### 目 次

第一章 <sup>お た</sup> 生い育ちし日々と揺れ動いた青春

〔1〕バイロン像——二つのバイロン

〔2〕生い育ちし日々 (1788—1805)

〔3〕揺れ動いた青春 (1805—1808)

(前稿に続く)

本稿のテーマは、

——詩人の生い育ちの背景的考証により、バイロン文学の  
ルーツを探る——

ことである。

なお、第一章〔3〕は次稿へ。

<sup>お た</sup> 生い育ちし日々と揺れ動いた青春

〔1〕バイロン像——二つのバイロン

バイロンの強烈な個性——

忍従と奔放、俠氣と絶望、苦痛と快樂、  
神と悪魔、美と醜、美德と背徳、愛と自我、  
貴族の血の誇りと 革新への叛逆、  
不撓不屈の勇氣 と のめりこむ憂鬱——

が、一個のバイロンの中に生き継いで、矛盾的対立を孕みつつ パラレルにひ  
た走り、相容れず、頑強にまで、相殺を、帰一を、拒否し続け、二つのバイロ

ンを創<sup>つく</sup>りあげていった。

それが バイロン像である。

詩人としてのバイロン と 象徴的人物としてのバイロン<sup>1)</sup>が 同時代の人々の心の中に生きたこと、そして未来永却を生き続けるであろうことへの希求、——そこに 光<sup>かが</sup>り 耀<sup>やう</sup>うバイロン文学の不滅性を究めようとするならば、この‘二つのバイロン’は 決して接点を求めてはならない。

- 1) cf. Herbert Read, Byron はその序論の中で、「象徴が詩を無視する、口実となり、詩が象徴に虚偽の感情を与へる口実となることは、不都合なことであったので、バイロンの詩と、バイロンの背徳的行為とは無関係に評価するべきである」と、従来の批判を批判する観点に立ち、バイロン詩の研究の徒に対して、——酷似する立場にあるゲーテ、シェレーの場合以上に、——この態度の必要かつ、重要性を強調して、論<sup>きと</sup>し、「この詩人の恋愛事件が非難された事実も、その生涯を自由に捧げたという事実も、バイロン文学が、世界の文学中に占める地位を微動だに揺らがすことがあってはならない。詩を道徳的に批判しようとするなら、証拠は詩そのものの中に見出すべきである。……」と厳に戒めたことは、あまりにも有名なことばである。警鐘の乱打であった。

矛盾と自由精神<sup>つらぬ</sup>を貫いた、同時代のゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe 1749-1832) とシェレー (Percy Bysshe Shelley 1792-1822)が、蒼穹を仰ぐごと、バイロンを、天界に上げ、‘世紀の星’、‘19世紀最大の才幹’と讃へ、‘生れながらの天才’、‘最も完全な天才’と激賞し、肝胆相照らしたことは、天才にのみ通<sup>あか</sup>い合う資性を証し得て いかにも感銘深く、百万言の批判を越えて興味深く、さ<sup>おほ</sup>わやかさを覚える。

“二つのバイロン”は接点を求めてはならない。——それは、パラドクシカル（逆説的）に、‘二つのバイロン’は切り離すこと、は、できない——と謂うことである。

本体と影、不則不離、表裏一体、実像と虚像、であって、盲人的対巨像観の描くバイロン像——似而非バイロン群像——であってはならない、  
という謂である。

何故ならば、バイロンは徹底して‘自己’をうたった 投影の詩人<sup>3)</sup>であり、バイロン詩の影に 詩人の強烈な個性と経験という、いうなれば詩人の体臭がふんぶんと匂っているから。

そして、これが バイロン文学の基調をなす最大の特質であるから。

3) cf. 斉藤正二氏はバイロン詩集（角川書店）の中で 次の如く のべている。

バイロンは、浪漫派の詩人である以上に、じつに “最初の近代人” であった。それだからこそ、バイロンの詩は、百五十年ほど経過したこんにちのわたくしたちにとって、すこしも古い感じがしないし、また注釈ぬきで共感することが可能なのである。もし鑑賞の手びきというようなものが必要であるとしたり、抒情詩から叙事詩（長篇物語詩）ないし劇詩にいたるまでのバイロンの作品にありありと投影されているところの、詩人自身の個性や体験がどのようなものであったかを知ることが必要なだけである。バイロン自身が「ぼくは、自分の経験や下地がなければ、何事によらず書くことができない」（トマス・モア宛、1816年1月6日書簡）と言っている。——

## 〔2〕生い育ちし日々

‘The glory and the nothing of a Name!’

栄光のうつろい、虚しく消えてゆく、人の世に、虚名を欲らざりし バイロ

ンは <sup>あ</sup>在りし日、既に、往くとして可ならざるなき天才を喧伝された！

スコットランドの野をゆけば、<sup>シスル</sup>thisle（あざみ）の花が咲きこぼれる。たくましく、耐えて咲く、<sup>とげ</sup>刺もつ花——やがて、白き<sup>かざばな</sup>風花となって 舞い散る<sup>さだめ</sup>運命もつ花である。

忍従と苦悩を生き、凄絶な嵐に散ったバイロン卿の生きざま——をそのまま咲き継ぐ thisle に、<sup>ところ</sup>情ある旅人は一掬の、涙して、そっとふれてゆく花である。

Stratford-on-Avon の Shakespeare の生家を、Wordsworth の生家を、訪ねる人々はその、あとを絶たない。

Burns の詩集の超ミニ版は、ヒースの花の一束にそえて、土産店にうられ、旅人は争ってこれをもとめる。

しかし——Lord Byron の場合、

Nothing remains of the London street in which Byron was born except the name, Holles Street. 'The glory and the nothing of a Name'-as Byron himself was to write of a poet's gravestone. Today there is no longer even a stone to commemorate Byron's birthplace, though in 1864 the first of London's blue plaques, erected to mark the houses of famous people, was placed there in his honour. Since then the brick eighteenth-century house in whose rented back room the poet made his debut has become the concrete cliff of a departmental store.<sup>4)</sup> Yet if Byron had to be born in London, Holles Street was appropriate. (Longford, Byron)

Byron は 1788 年、London Street に 生れたが、そこには、今日、Holles Street という名前しか、詩人の生誕をしのぶすがはこのこされていらない。

‘The glory and the nothing of a Name’

栄光と 価値なき‘名’ よ、

一人の詩人<sup>うたびと</sup>の墓石とは そのようなものよ、と、バイロン自身、書いたのだが、

今日、バイロン生誕の地を記念する標石すら、もう のこっていない——  
もっとも、1864年、多くの有名人たちの在りし日の生家の跡を示すべく 最初のブルー・プラークが彼、バイロンの生誕の場所に、バイロンの栄光を記念して設置されたのではあるが。

そのとき以来、詩人がデビューした当時、——その裏手の部屋を借りていた、のだが——その、18世紀のころのその煉瓦造りの家屋は、今日、デパート<sup>4)</sup>——John Lewis であるが——の コンクリ壁に変わってしまっている。

4) John Lewis, the store in question, has a Byron Room.

しかし、バイロンが ロンドンで、産ぶ声をあげるべき星の下にあったとすれば Holles Street はいかにも彼の生誕の地にふさわしかったのだ。

何故なれば——

Elizabeth Longford はその間の事情を次のごとく述べている。

Like the adjacent streets and squares it had been called after the nobility whose money built it. Lady Henrietta Cavendish Holles was an heiress who married the Earl of Oxford, head of the Harley family. Holles Street joins Oxford Street to Cavendish Square, and so to Harley Street and Devonshire Place. When Byron reached manhood these names of interrelated families flourished in Whig society, and their

bearers scattered thorns or roses in his path. The niece of Georgiana Duchess of Devonshire, Lady Caroline Lamb, supplied the thorns, while the Countess of Oxford shared a bed of roses. (E. L.)

隣接の通りや街区のように、Holles Street は この街づくりに投資した貴族の名前にちなんで 名づけられた のである。

Lady Henrietta Cavendish Holles は——Harley 家の領主たる Oxford 伯爵と結婚した——資産家の相続者であった。

Holles Street は Oxford Street, を Cavendish Square (方形広場), 従って, Harley Street 及び Devonshire Place (広場) へと<sup>むす</sup>連結んでいる。

バイロンが成人した当時は、このような因縁のからんだ家柄の名家の多くが保守的ホイッグ党社会できら星の如くけんらんと華やいでいた。

そしてこの名家の人々が 若きバイロンの行途に<sup>いばら</sup> 茨を、そして<sup>そうび</sup> 薔薇をまき散らしたのだ。たとえば、

Georgiana Duchess of Devonshire 公爵夫人 Lady Caroline Lamb は<sup>いばら</sup> 茨で詩人を<sup>き</sup>刺し Oxford 伯爵夫人は、一方、詩人と薔薇の<sup>しとね</sup> 褥を共にした。

The most important thing about Byron's ancestry was the Celtic strain on both sides. The poet's grandfather Vice-Admiral Sir John Byron came of a north midlands family going back to the Norman Conquest, and married his first cousin Sophia Trevanion of Cornwall. She was a blue-stocking of true Celtic sprightliness greatly valued in Dr. Johnson's circle. Celtic appreciation of consanguinity may have accounted for the many loves between siblings and cousins among the Byrons. The Admiral himself had been remarkably fond of his sister Isabella. (E. L.)

「バイロンの祖先について、最も注目すべき重要なことは、父方、母方、両家において脈々と承けつがれた ケルト人 気質 Celticism である……。」(E. Longford, Byron)

詩人の祖父 John Byron 卿は <sup>ノルマン</sup> Norman <sup>コンクエスト</sup> conquest に <sup>さかのぼ</sup> 逆る 英国北中部州の家柄の血をひく名門の出であり、血縁（実のいとこ）の Sophia Trevanion of Cornwall と結婚した。

彼女は Dr. Johnson のサークルでは重視された 真にケルト気質的快活さを備え、文芸協会（当時 18世紀中期にロンドンの知識婦人が組織した）の中心メンバーでもあった。

この、純血（同族、兄弟、姉妹、従兄（姉）、弟（妹）、結婚）をよろこぶケルトの気質がバイロン家一族の間に頻出した血縁がよび合う多くの恋愛事件を説明するものと考えられる。——バイロン中將も異母妹 Isabella に異常にまで思慕をよせた。

詩人の——異母姉 Augustas への異常までの偏愛——そして、それは破戒的な背徳として、当時の社会が痛罵し、やがて、詩人は exile の身を寂しく国外へとさすらう要因ともなったが……

詩人のこの破戒的愛 も、この一門の Celtic strain ケルトの血 が充分にこれを説明する。‘呪われた血’ cursed blood の詩人である宿命を、星を背負ったバイロンであった。

It is debatable whether Byron was more affected by his ancestry or his deformity. Professor Marchand, his biographer royal, plumps for the latter. ‘George Gordon, the sixth Lord Byron, was born with a lame foot on January 22, 1788...’ Certainly the lame right foot, today thought to be dysplastic or clubbed, distorted Byron’s life. From earliest childhood he learned to bear pain. In proud youth his deformity

taught him shame and concealment. When he grew to manhood it introduced him to the problem of evil; who or what caused such unmerited suffering? Without deformity he might never have developed his compensatory talents for boxing, swimming, riding, target-shooting and love-making. (E. Longford, Byron)

バイロンの強烈な個性が彼の祖先の血にその roots をもとめるべきか、彼の生れながらの跛<sup>びつこ</sup>という身体障害にあるのか、そのいずれが より大きな影響を及ぼしたのか。

このことは、考究すべき問題であるが、バイロンの忠実な伝記作家である Profeser Marchand は 跛 という不具の身体による影響の方が多かったのだという考えを全面的に支持している。

「ジョージ・ゴードン、第6代バイロン卿は 1788年1年22日、生れたとき、すでに跛であった。」

たしかに、その跛の右足は、——今日では dysplasic 異形成的、或いは clubbed 湾曲足的ものと考えられるが——バイロンの生涯をいびつなものにしてしまった。

幼い少年の頃より、詩人は、苦痛に耐えることを身につけた。傷つき易い少年期、誇り高い青春の日々を、不具ゆえに屈辱を味わい、それからの逃避、擬態を思わねばならなかった。成人するにおよび、不幸、避け難い災禍の問題を、跛の障害ゆえに悩みわづらわねばならなかった。

——誰ゆえに、何ゆえに、かくの如く、不当な苦しみを耐えねばならないのか——と。

身障者でなかったならば——

詩人は、これほどまでに、跛の障害を償うべく、擬装すべく、ボクシングに、水泳に、標的射撃に、愛の遍歴に、ひたむきに 情熱をかたむけることはなかったであろう。そして——



あの poeser (気取屋) としての虚構的姿勢がつくられていった。しかも、それは、弱さを決して みせまいとする、強者たる誇りを示威しようとする poeser の姿であった。

ここにも、ひとつのルーツをかいまみることができる。

The head of the family was the fifth Lord Byron, the Admiral's elder brother and the poet's great-uncle. He had earned the title of 'Wicked Lord' after killing a relative and neighbour, Mr. Chaworth of Annesley Hall, in a duel. Horace Walpole said he was mad. Though the House of Lords acquitted him of murder, he lived henceforth as a scandalous recluse at Newstead Abbey, the family home in Nottinghamshire, with 'Lady Betty' a servant-girl. (E. L.)

バイロン家第5代の家長は海軍提督の兄、詩人の大伯父にあたり、隣家の親戚筋にあたる Annesley 城の Chaworth を、血闘の末、殺害し、‘Wicked Lord’ (悪殿様) の悪名が高かった。

貴族にのみ適用された特権により殺人罪は解かれたが以後、恥すべき醜聞をさらし世を捨てた隠者としてニューステッド・アベイで余生を送った。

The poet's father was another black sheep. This 'Mad Jack', the Admiral's son, had all the dash of a Guards captain, but he proved more adept at capturing heiresses than enemies. He eloped with the wife of Lord Carmarthen. After her divorce they were married, and in 1783 a daughter called Augusta Mary was born—the poet's half-sister. The mother died, but as long as her fortune lasted, 'Mad Jack' disported himself in France. Then he came back for another heiress. Within two spring months of 1785 he met and married in Bath a Scottish lass

of twenty with an over-buxom figure, a burr, and a moderate fortune of £23,000. This was Catherine Gordon of Gight, Byron's mother. (E. L.)

詩人の父も、変わり種で極端な奇行に走ることがしばしばで‘気狂い、ジャック’ ‘Mad Jack’ の悪名高き人物で、海軍提督の長子である。近衛軍大尉として颯爽とした美男子であったが武人としてよりも 資産家の相続人たる女性を射とめる手腕 に、より<sup>た</sup>長けた放蕩児であった。

Lord Carmarthen 夫人と墮落ちし、彼女の、夫との離婚後、二人は結婚し、1783年、長女 Augusta Mary オーガスタ・メアリが生れた。すなわち、詩人の異母姉である。

この妻——オーガスタの母——の死後、彼女の遺産のつづくかぎり、フランスで遊蕩三昧にふけた。その資産を蕩尽するや、ふたたび、故郷に舞い戻り、そこで、又、別の資産家の女相続人をハントして、1785年、春2ヵ月の間に、Bath の町で、かなりの資産—23,000ポンド—のある、20才のスコットランド娘と出会い、あっというまに結婚する。

即ち、Gight 荘園の領主たるキャサリン・ゴードン令嬢であり、詩人の母である。

A Celt, it seemed, if ever there was one. She once bit a piece out of a saucer and her temperament would produce hysterics at the theatre, an excitability which her little boy probably inherited. While watching *The Taming of the Shrew* he jumped up and loudly contradicted the bullying Petruchio. Catherine Gordon's ancestry was bursting with romance and drama: royal descent from Annabella Stuart daughter of James I of Scotland, five murders, two hangings, one excommunication, and a possible suicide. (E. L.)

詩人の母 Catharine は、——そもそも、ケルト人が、当時、生きていたとす

るならば——典型的 ケルト人 であった。

Catharine は かつて、皿からその一片を噛みきったこともあったほど、の癪性の激しい女性であった。そのため、劇場でも観劇中ヒステリーをおこしたこともしばしばあり、その激しい気性が 少年バイロンに そのままに、ひきつがれていった。詩人は、少年のころ、*The Taming of the Shrew* (ジャジャ馬馴らし) を観劇中、弱い者いじめをしている *Petruchio* に対して猛然と声をはりあげ、かなりたて、激しく抗議したこともあった。この Shakespeare の作品中の *The Shrew* (がみがみ女)、*Catharina* (女主人公) が、詩人の母 *Catharine* と同名で、性格的にも一脈 通うことに、多感な少年は *excite* したためであろう。

とも角、*Catharine Gordn* はロマンスとドラマにみち溢れていた祖先の血をひいていた。そして、その *Celt* の激しい気性が、詩人へとうけつがれていった。

スコットランドのジェームス一世の娘 王女アナベラ・スチュワートから降下した子孫であり、名門を誇る一族であるが殺人者 5 人、絞首刑に処せられた者、2 人、破門者 1 人、そして自殺者と目されるもの 1 人 という 多くの *black sheep* (変り種) が輩出した ‘濁れた’ 先祖の歴史をつたえたゴードン家である。

The whirlwind which had swept Catherine into matrimony soon scattered her fortune. She loved and lashed her Johnny Byron when they met, but he dared not meet too often for fear of meeting his creditors also. Having lived with him three months in France, Catherine took the lodgings at 16 Holles Street for her confinement because they were relatively cheap. Afterwards she dodged about the home counties with her baby until 1789 when the family moved to Aberdeen, where they tried to live together at opposite ends of Queen Street. Byron, though under three, always remembered the ‘domestic broils’ which led

to his own early 'horror of matrimony'. Of his father he wrote: 'He seemed born for his own ruin, and that of the other sex'—a judgment which Byron transferred to his own destiny. The Captain decamped once more to France in 1790 where he poured out his love upon a woman far dearer than his wife—Mrs Frances Leigh his sister. He died in 1791 aged thirty-six. It was a fatal age for the Byrons. Both the poet and his daughter Ada were to die at that age. (E. L.)

あつ という<sup>ま</sup>間の春一番! Catherine の<sup>ふところ から</sup>懐を虚っぽにして 捲きあげて  
いった美男の蕩兄! キャサリンは この夫の ジョニー との逢う瀬を 燃  
えに燃えた しかし 債鬼の手は<sup>しつよう</sup>執拗に 迫って ジョニーを追いかけた。

燃える炎 に水が! 武人たるジョニーにこの敵を撃退する勇氣はなく、ただ  
逃げ回るだけだった。キャサリンの<sup>こころ</sup>情<sup>いらだち</sup>みたされぬ 焦燥!

熱血たぎるケルトの乙女 キャサリンの この<sup>いらだち</sup>焦<sup>ち</sup>を その激しい癪性を  
跛の少年、愛児バイロンに 投げつける! a 'lame brat'! ちんばの がきめ!  
しかし母からのこのこの、しうちにも、バイロンは、この母を、この父を、終  
生、心から憎みはしなかった。詩人のや<sup>さ</sup>し<sup>さ</sup>、心のゆ<sup>た</sup>け<sup>さ</sup> 人間バイロン  
の お<sup>お</sup>ら<sup>か</sup>を かいまみて少年の日の詩人の生いたちに 一掬の涙を世  
人は おくることであろう。

債鬼をのがれ、フランスで 3 ヶ月 を過したのち キャサリン は、 ロンドン、  
Holles Street の下宿に閉じこもる。その後 baby Byron をつれ 故郷に帰り  
転々とし、1789年 Aberdeen にすむ。

3才に満たぬバイロン少年に、両親の結婚によるこの一家のごたごた は  
脳裏にやきついて、それが初期の作品 'horror of matrimony' にうたわれた。

詩人は この父を回想して '父はこの世に、自らの破滅をもとめて、そして、  
女性を破滅へと追いやるべく生れついた人だった'、とのべている。

そして詩人自らも、この父 と同じ女人遍歴の星をたどってゆくのだが……

父 Johnny は 1790 年、再び、フランスに逃げキャサリンよりも、Mrs. Frances Leigh—Charles Leigh 大尉夫人で、Johnny の実妹——に愛をそそぐ。そして 1791 年 36 才で死んだのだが、36 才はバイロン家の人々には、‘命取り’の厄年であったようだ。詩人自身も、詩人の娘 Ada も又、父 Johnny 同様、36 才で死ぬ運命に<sup>きだめ</sup>あった。

Mrs. Byron's lawyers had been able to retrieve less than £150 a year out of her fortune. Gight, of which Catherine was the thirteenth and last ‘laird’, was sold. Some of her son's suspicions of the number 13 stemmed from this fact — and from his parents marriage date, 13 May. Meanwhile his mother, now living alone with him and a maid, Agnes Gray, in Aberdeen, proved to be as provident economically as she was unstable emotionally. Moods of depression alternated with bursts of intense tenderness or furious temper: ‘Ah, you little dog, you are a Byron all over...’ She once called him a ‘lame brat’—an infamous taunt, particularly as her son came to believe, though mistakenly, that his deformity had been caused by her false modesty at his birth. But her successful management of the pence enabled her to acquire in Aberdeen's best thoroughfare, Broad Street, a six-roomed apartment. Her four-year-old son was sent to ‘Bodsy’ Bower's neighbourhood school, where Geordie, obstreperous but prepossessing in red jacket and nankeen trousers, learned by rote, ‘God made man, let us love Him.’ God's love for man, however, was given a disastrous twist in Geordie's mind by his Calvinistic nurse, Agnes Gray. She taught him that some people were sinners predestined to damnation, a doctrine which darkened his life. At the same time she introduced him to the beauty of biblical language. (E. L.)

バイロン未亡人は弁護士の奔走により、その財産より年間 150ポンド たらずを取りもどすことができるようになっていた。

Gight 荘園の領地——彼女が、その第13代の、そして最後の領主だった——は売却された。

少年バイロンの13という数字への不信感はこのことに由来するのだが、そして、ちなみに、両親の結婚日も、5月13日 であったことにも……。

母キャサリンは少年バイロンとメイドの Agnes Gray とアバディーンに移り住み、情緒的に変わり易かったが、金銭的には儉約家だった。

非常な優しさと癪癢が 数時間毎に 激しく波打った。

‘Ah, you little dog, you are a Byron all over…… ああ、なんて下賤っ子！ 全身バイロンの家の血をひくから……’

‘a ‘lame brat’ ちんばのガキっ子！’

少年バイロンの幼いむねに この母よりの、屈恥かしめと 嘲り が、——実は、そうでなかったにせよ——自分の不具は 自分の出生における母の偽れるへりくだりにより生じたのであると信じこむようになった。

スコットの伝統的節儉の美風を身につけており、家計のきりもりの手腕の冴える母ゆえに、アバディーンを目ぬき通り Broad Street に6部屋つきのアパートに移りすむ。

4才の少年バイロンは 近所の ‘Bodsy’ Boover’s 私塾に通うようになり、ここで、赤い上衣と南京木綿のズボンの、やんちゃな、チャーミングな恰好で ‘God made man, let us love Him’ の文句を暗気させられた。

しかし迷信的カルビン主義の乳母、Agnes Gray が、神の愛の教を 少年の心の中で、不幸にも、ひんまげたものにしてしまった。彼女は少年の心に、破滅への運命を約束された生れながらの罪人もいするという暗い教義を ふきつけた。同時に、聖書のことばの美しさも教えこんだのであったが……

この Agnes Grey よりの感化は、少年バイロンにとって よかれ、悪しかれ、その影響は、大きく、後の作品の中で、その影と光りを投げかけている——。

After acquiring from tutors a ‘grand passion’ for history, he entered Aberdeen Grammar School at seven under the name of ‘Geo. Bayron Gordon’. (His father had taken his mother’s name on marriage.) Geordie was therefore correct when he later declared himself ‘half a Scot by birth, and bred a whole one’. He was a whole Scot in his wide reading (he preferred Eastern travel and Gothic tales) and in his love of the hills and waters. He would swim in the ‘black deep salmon stream’ which widened into a pool under the ‘Brig o’ Baldounie’. In his speech he was all Scot, and not a few of his sayings have survived in their Aberdonian vitality: ‘Dinna speak of it!’ (to a woman who pitied his lameness); ‘Come and see the twa laddies with the twa club feet going up Broad-st!’ (of himself and a lame school friend); and when he was in one of his rages he became ‘Mrs. Byron’s crookit deevil’. Above all he was a Scot and a Gordon in his earliest love affair with Mary Duff a cousin, when both were seven, an idyll to be celebrated in one of his earliest love poems, ‘When I Roved a Young Highlander.’

歴史への情熱をも、この私塾で かきたてられ、7才になると Aberdeen Grammar School に Geo. Bayron Gordon の名前で入学。

彼の父が、結婚のとき、母方の姓をついでいた関係で。

バイロンは後年、自身、明言した如く、‘生れはハーフ（イングリッシュとスコットの）であるが、全面的にスコットランド人として育った。’

つまり、正確な名前は Geordie で、広範囲な読書においても、スピーチにおいても、彼が怒り癪癪をたてるときも、又、多くの彼がのこしたアバディーンの生気潑刺とした格言においても。

‘*Dinna* speak of it!’

‘Come and see the *twa* ladies with the *twa* club feet going up *Broad-st!*’

とくに、従妹のメアリー・ダッフに恋心を感じたとき、あの、彼の最初の恋歌として有名な ‘When I Roved a Young Highlander’ において、スコットの血をひく少年として、名門ゴードン家のキャサリンの血をひいた少年 Geordie だった。

そして スコットランドの高原を 生き生きと 駆けめぐり、メアリーへの想いを、生い育ちし山に野にオーバーラップさせるのであった。そのような生粋のスコットの少年ゴードンであった。（このころはまだ第6代バイロン卿を嗣いでいなかった。）

“スコットランドの高原をさまよいしとき”の恋歌は  
スコットランドに生い育ちし誇り、を、  
ハイランダーの少年の誇りを、高らかにうたい、プラトニックなメアリー・ダッフへの初恋を、回想した詩人8才のころをしのぶ歌である。

# WHEN I ROVED A YOUNG HIGHLANDER.

## 1.

When I rov'd a young Highlander o'er the dark heath.

And climb'd thy steep summit, oh Morven of snow<sup>1</sup>

To gaze on the torrent that thunder'd beneath,

Or the mist of the tempest that gather'd below;<sup>2</sup>

Untutor'd by science, a stranger to fear,

And rude as the rocks, where my infancy grew,

No feeling, save one, to my bosom was dear;

Need I say, my sweet Mary,<sup>3</sup> twas centred in you?

1. Morven, a lofty mountain in Aberdeenshire. “Gormal of snow” is an expression frequently to be found in Ossian.

2. This will not appear extraordinary to those who have been accustomed to the mountains. It is by no means uncommon, on attaining the top of



Ben-e-vis, Ben-y-bour, etc., to perceive, between the summit and the valley, clouds pouring down rain, and occasionally accompanied by lightning, while the spectator literally looks down upon the storm, perfectly secure from its effects.

3. [Byron, in early youth, was “unco’ wastefu” of Marys. There was his distant cousin, Mary Duff (afterwards Mrs. Robert Cockburn), who lived not far from the “Plain-Stanes” at Aberdeen. Her “brown, dark hair, and hazel eyes—her very dress,” werelong years after “a perfect image” in his memory. Secondly, there was the Mary of these stanzas, “with long-flowing ringlets of gold,” the “Highland Mary” of local tradition. She was (writes the Rev. J. Michie, of The Manse, Dinnet) the daughter of James Robertson, of the farmhouse of Ballatrich on Deeside, where Byron used to spend his summer holidays (1796-98). She was of gentle birth, and through her mother, the daughter of Captain Macdonald of Rineton, traced her descent to the Lord of the Isles. “She died at Aberdeen, March 2, 1867, aged eighty-five yers.” A third Mary flits through the early poems, evanescent but unspiritual. Last of all, there was Mary Anne Chaworth, of Annesley whose marriage, in 1805, “threw him out again—alone on a wide, wide sea”

2.

Yetit could not be Love, for I knew not the name, —

What passion can dwell in the heart of a child?

But, still, I perceive an emotion the same

As I felt, when a boy, on the crag-cover’d wild:

One image, alone, on my bosom impress’d,

I lov’d my bleak regions, nor panted for new;

And few were my wants, for my wishes were bless’d,

And pure were my thoughts, for my soul was with you.

3.

I arose with the dawn, with my dog as my guide,

From mountain to mountain I bounded along;

I breasted<sup>1</sup> the billows of Dece's<sup>2</sup> rushing tide,  
An dheard at a distance the Highlander's song;  
At eve, on my heath-cover'd couch of repose,  
No dreams, save of Mary, were spread to my view;  
And warm to the skies my devotions arose,  
For the first of my prayers was a blessing on you.

1. "Breasting the lofty surge."—SHAKESPEARE.

2. The Dee is a beautiful river, which rises near Mar Lodge, and falls into the sea at New Aberdeen.

4.

I left my bleak home, and my visions are gone;  
The mountains are vanish'd, my youth is no more;  
As the last of my race, I must wither alone,  
And delight but in days, I have witness'd before;  
Ah! splendour has rats'd, but embitter'd my lot;  
More dear were the sdenes which my infancy knew:  
Though my hopes may have fail'd, yet they are not forgot,  
Though cold is my heart, still it ling with you.

5.

When I see some dark hill point its crest to the sky,  
I think of the rocks that o'ershadow Colbleen;<sup>1</sup>  
When I see the soft blue of a love-speaking eye,  
I think of thoseeyes that endear'd the rude scene;  
When, haply, some light-waving locks I behold,  
That faintly resemble my Mary's in hue,  
I think on the long flowing ringlets of gold,

The nlocks that were sacred to beauty, and you.

1. Colbleen is a mountain near the verge of the Highlands, not far from the ruins Dee Castle.

6.

Yet the day may arrive, when the mountains once more

Shall rise to my sight, in their mantles of snow;

But while these soar above me, unchang'd as before,

Will Mary be there to receive me?—ah, no!

Adieu, then, ye hills, where my childhood was bred!

Thou sweet flowing Dee, to thy waters adieu!

No home in the forest shall shelter my head, —

Ah! Mary, what home could be mine, but with you?

(First published, 1808)

(試訳)

“高原をかけし少年”

ハイランダー、我、	われお	幼さなき日日は
さまよひゆきし		ヒースの野かけ
峻しく、雪の、	けはよ	峯を攀じゆく
モーヴンよ、あゝ、	けだか	高貴く 聳ちて
流れゆく、下を	げ	雪解の水は
奔流 となりて	ほんりうとどろ	轟 き やまず
遙かに あつむ		嵐よぶ 霧
みつめいて顛つ	た	無色の 思想
おしへをあおぐ		ひとりの師なく
うれふるなくて		無心に遊ぶ
いはお		
巖 の めぐり		われをかこめる

そこに <sup>お</sup> 育 <sup>ひ</sup> たつ	おきな日、粗 <sup>あら</sup> 暴く
ただひとつのみ	懐 <sup>おも</sup> ひは かける
吾 <sup>あ</sup> が恋 しつゝ	いとしく炎 <sup>も</sup> えて
この <sup>むねうち</sup> 胸裡ぞ	口にせずとも
優 <sup>やさ</sup> しき メリー	きみを呼びゐし

Soon after his tenth birthday it all ended and, strangely, he never saw Scotland again. The 'Wicked Lord' died on 21 May 1798. His only grandson had been killed in Corsica and George was heir to the barony. So Geordie Gordon became 'Dominus de Byron' at the school roll-call, and though the first shock of his new identity caused him to burst into tears, he was not displeased to be a lord and a Byron. 'Trust Byron', he had once proudly declared, quoting the family motto when about to repay a debt of honour by thrashing a schoolfellow. *Crede Byron* also stood for his truthfulness, loyalty and sense of justice. And now for his English inheritance.

10才の誕生日を過ぎて、1798年5月21日、第5代バイロン（‘悪殿様’）の死によって、少年バイロンは、Geordie Gordon から、Dominus de Byron バイロン家、第6代の家長となる。

始めて、学校での出席簿で、ゴードン家より バイロン家、家長<sup>ひとしお</sup>への身分の移動を呼名されたとき 感懐一入で、ショックのあまり ワッ と泣き出した。しかし バイロン家のモットー たる、誠実、忠誠、正義感、は、彼自身の誇るべき英国的遺産として、後々の生活信条として、彼の血にうけつがれてゆく。

少年バイロン卿にとって、代々バイロン家の居城たりしニューステッド・アベイのそのゴシック風の<sup>やかた</sup>館は、修道院時代からの伝説にみち大いに心を動か

すものであった。

しかし、アバディーン<sup>アバディーン</sup>の全財産を処分し、母と家政婦メイ・グレイと共に、1798年8月の下旬、現地につき、秋に、その城館に足をふみ入れ案内されたとき、その荒廃ぶりは、とても住むには耐ええない 廃墟となっていた。

泉あり、滝あり、18世紀の塞<sup>とりで</sup>あり 中世風の大建築あり、Sherwood Forest<sup>シャーウッドの森</sup>のなごりが3,000 エーカーの露出し<sup>むきだ</sup>の所領をとりまくこのバイロン家の居城に少年バイロン卿はすっかり魅せられるが一住むには耐えず、Nottingham に移りすむことになる。

He was lame from his birth, not as has been supposed from a club-foot, but as the result of “infantile paralysis which affected the inner muscles of his right leg and foot.” It was the right foot, not the left, which was malformed. His mother’s testimony (in a letter dated May 31, 1791) is conclusive: “George’s foot turns in ward, and it is the right foot.”<sup>1</sup> With the vain hope of strengthening his muscles after an attack of scarlet fever his mother sent him in the summer holidays of 1796, and, possibly, again in 1797, to drink “goat’s fey,” at a farm-house at Ballaterich on Deeside. His lameness did not prevent him, though with pain and difficulty, from wandering by rugged ways, and then it was that he acquired, or discovered his passion for mountain scenery which haunted him to his life’s end. [Ernest Hartley Coleridge: The Poetical works of Lord Byron. John Murray]

1. It is possible that in after life both legs were more or less atrophied, and that this accounts for the conflict of opinion as to right or left leg. For instance, Trelawny says that the right leg was affected, Dr. Julius Millingen that the left foot and leg were malformed. Both were eye-witnesses, as they saw the poet’s body after death, and took particular note of the feet and legs. [see *Letters*, 1898, i. 11, 12; note 1.]

バイロンが生れながらにしてびっこであったのは、彎曲足のためだと考えられたが、そのようなものではなく、実は彼の右脚足の内部のすじに影響を及ぼした小兒麻痺の結果であった。

異形していたのは左ではなく、右脚（足）だった。1791年5月31日付けの彼の母の手紙は‘ジョージの足は、内側に彎曲していて、それは右足です’と証言している。

少年バイロンが猩紅熱をわずらってのち、1796年（そして、多分 1797年にも、また、）の夏休暇の間、Deeside の Ballaterich の農家に山羊の乳漿（“goat’s fey”）<sup>1)</sup> をのむために 遣らされるのだが、それは、虚しいのぞみであるとしても、少年の筋肉を強化してやりたいとの母の願いによるものだった。

彼の跛は、多少の痛みと歩行困難はあるにせよ、でこぼこ道をさまようのには、支障はなかった。そして 彼が、一終生つきまとった一山の景色への異常な情熱をかきたてられたのは実にこのときだったのである。

1) bey [スコットランド語]=whey 乳漿は山羊の乳から凝乳を取ったあとの澄んだ液。

後になって、ひょっと、両脚が、多かれ少なかれ、萎縮したことは ありうることで、それゆえに、問題の跛が、右足か、左足かについて意見が衝突したものであろう。

たとえば、Trelawny は右脚がおかされているとのべ、そして Dr. Millingen は左足（脚）が 異形しているとのべている。がこの両意見の喰いちがいは、両者が、詩人の死後の遺体を、診て、その両脚（足）を特に注目したときの観察の結果による証言であった。

Since his lameness had not improved, he was sent early in 1799 to Nottingham where he attended a quack named Lavender, trussmaker to the Infirmary, who screwed his leg into a painful wooden frame. His nurse, the bibulous May Gray, sister of Agnes, varied her affairs with chaise-boys by hopping into bed with Byron. ‘My passions were

developed very early’, he recalled. He complained of her to his solicitor and agent, John Hanson, (who had described him as, a fine sharp boy’), and was sent away to Dr. Glennie’s school in Lordship Lane, Dulwich. (E. L.)

跛の病状が、はかばかしくないので、1799 年になってすぐ、ノッティンガムで診てもらのだが、(綜合病院に専属のトラス・メーカーであって専門医ではない) Lavender という戴医者 が、少年の右脚をねじて、苦痛を覚える木製のわくにはめてしまう。

この足枷<sup>あしかせ</sup>！ 少年バイロンにとって、苦痛を与えるのみで、一利なき、この戴医者の処置<sup>しちう</sup>！ 桎梏<sup>しこう</sup>からの解放<sup>あは</sup>！ を少年は叫んだ！

‘I was born so Mother!’ (Deformed I. i. 1)

少年の日に、斯<sup>こ</sup>のような粗<sup>あら</sup>っぽい処置ゆえに跛の障害の苦痛を極限にまで耐えねばならず、齒を喰いしばった、その忍従と勇氣！ 芽生えていった熾烈な叛逆の精神！ 桎梏よりの解放への叫びは、たちまち、ハロー校で、新校長排斥運動の陣頭に立ち嵐をよんだ少年バイロン卿の姿でもあった。

詩人バイロンの生いたちに、その背景の奥に、バイロン文学のルーツ<sup>さく</sup>を探るならば、この跛の身障そしてその処置としての桎梏が最たるものとして挙げられるであろう。

さらに、もう一つの注目すべき、ルーツを探るならば――

ここに一人の女性が登場する。世に隠れた女性であるが、是が非でも、ひきずり出さねばならぬ！

たいへんな女である、くわ<sup>く</sup>せ<sup>わ</sup>も<sup>せ</sup>の<sup>も</sup>である。バイロン卿の生涯の最初の十二年間の幼少年期を乳母としてつかえた May Grey である—Agnes Grey の

姉（妹）—

大変な、大酒のみ、好色女、放蕩女、である。

‘Byron’ by Herbert Read によれば

この May という女性は <sup>おきな</sup>幼い バイロンにたいへんなこと、終生とりかへしのつかない経験を与えたようだ。

May という女性は

逆信的カルヴィン主義と性来の放蕩性を併せもち、

託された幼（少）児バイロンに相当愛され慕われたようだ（ヒステリックな母のことを考えると充分うなづけることだが）、

しかし

骨が痛むほど 絶えず打擲<sup>ちううちやく</sup>を あたえる、

少年の部屋に最下等の者たちをつれこむ、

少年をつれてベッドにとびこみ、馭者との情事をよりたのしむ、

馭者をひきつれ、いかがわしい夜の酒場をのみあるく、

少年の母の悪口をいう。 といった、

まったく、たいへんな 乳母であった。

‘バイロン家の弁護士ジョン・ハンソンは、1799年、ノッティンガムを訪れ、この乳母と少年との間に当時存在した関係に驚き、乳母を直ちに解雇するようバイロン未亡人に書き送っている’。（ハーバート・リード ‘バイロン’）

‘バイロン自身、1821年の日記「断想」の中で幼時の致命的経験としての彼女との関係が、性の目ざめをあまりにも早め、このことが、人生観を終生暗いものにした。しかし私は、このことは、絶対、口外したくない。なぜならば、自分の周囲のものに迷惑をかけることを怖れるから’とのべている。



‘私の熱情は大変幼いときから開発された。!’ 当時を想起する鬱屈<sup>うつくつ</sup>した暗い生涯を、女性遍歴にせめて、その心を慰めることとなったのである。

幼少期、ハンソンに この拭い難い鬱屈を訴へ、Dulwich, Lordship Lane の Dr. Glennie's school へ遣<sup>や</sup>られることになったのは、このような重大な事情によるものであった。

Dulwich 校での18ヵ月間、ハンソン一家にひきとられ、大変かわいがられたのしく幸せな生活を送り、又、名医、Dr. Matthew Baillie の世話になる。

教育に異常にまで熱心であった母は、1801年4月、貴族教育を誇る名門 Harrow に入学させる。その理由は、Dulwich での勉学の成果が必ずしも、母にとって 満足のゆくものでなかったことと、当然、貴族の誇りとしての教育に名門校ハロー での躰、紳士としての教養が必要であることを バイロン未亡人は 熟知していたからである。

ハローに入学した バイロンは しかし、ここで、たいへんな 旋風をまきおこしてゆく。

Byron was not happy. ‘I always *hated* Harrow until the last year and a half,’ he wrote. He hated the ‘drill’d dull lesson’ and the school discipline. Turbulence was the keynote of his public activities. Even as an orator on Speech Day he himself referred complacently to ‘my turbulence’. His private melancholy would express itself in reverie under an elm in the churchyard, where he lay on a gravestone. (E. L.)

ハローに入学したバイロンは、すこしも、幸福な毎日ではなかった。Dulwich ではハンソン一家に温かく みまもられた幸福な生活の中に、きびきびとした明るさを見出し、ハンソンからは‘きびきびとした惻愴な少年’、——すこし年上であった——、その娘からは‘可愛い坊や’とよばれ一家をあげての寵愛

を一身にあつめた、その後であっただけに、ハローの生活に味気なさを、ひとしほ深くくみとったことであろう。みずから述懐している。——

「私は、ハローを卒へる最後の一年半になるまではいつも、この学校を憎みきらった」と。

毎日の学校での勉強、課業の無味乾燥、そして学校の規則をひどくきらった。Speech Day には いつも、‘私の心の騒<sup>さわ</sup>ぎ’ ということに言及し 自己満足にひたったものだった。そして、バイロンは生れながらの雄弁家でもあった。心に巢喰う憂愁、鬱屈<sup>にれ</sup>を教会の墓地の榆の木の下で回想にふけることで慰やすべく、そこの墓石の上に よこたわった。

少年バイロンは、気むづかしい、矯慢のゆえに級友の間で不人気であったが、じょじょに校内でも寵児として人気の的になってきた。

詩的な、空想ずきな、ひとりでこっそりと寸暇を惜しんで食<sup>む</sup>ほるが如き読書、そして、水泳の、クリケットの名手として、イートン Eaton 校との伝統的對抗試合に活躍し、又、生徒の権利を擁護<sup>まも</sup>る正義の闘志として、又、いた<sup>ゝ</sup>ず<sup>ら</sup>の首謀者として、つねに陣頭に立った。

少年バイロン卿の、このころの得意満面の心境は、彼自身の述懐として「人生において、はじめて、そして、これを最後に、これっきり一度だけ、幸福とは何か ということをしみじみと知った」と述べている。

けんかの強い、がき大将、いた<sup>ゝ</sup>ず<sup>ら</sup>好きの小バイロン は、いつも、先生に叱られ、お仕置<sup>し</sup>きをうけた。

松下村塾式寺小屋ふうのハローの旧校舍は今でも ハローの丘に残されており、そこにバイロン懲罰台が、彼の学んだ机が、黒びかりして温存されている。手にふれてみて、彼の体温がつたわり来る如く、懐旧の情にひたらせてくれるのであるが……。

この旧学舎の教室から、英国の宰相7人が輩出しており、その教室の板壁全面に刻まれた——チャーチル卿など卒業生の——ずらりとならんだ輩出した偉人群の名——みずからの手でハロー在校中に刻んだもの——の中に、一きわきわだつ<sup>ゝ</sup>た<sup>ゝ</sup>き<sup>ゝ</sup>な文字で、BYRON と刻まれているのをまのあたり見て 異色

の詩人の強い性格と数奇な生涯を みずから 後世に誇示して刻んだ少年バイロンの意図が偲ばれて——微笑ましく、力づよく、千古に、人の心をうつ感動が蘇ってくるのを覚えた。

The summer days of 1800 and the dark eyes and long lashes of Margaret Parker, a first cousin, produced his ‘first dash into poetry’. Byron long remembered her ‘transparent’ beauty, evanescent as a rainbow. She died of consumption in 1802.

Dulwich had become ‘this damned place’ and in the spring term of 1801 Byron went to Harrow, a ‘public school with 250 boys at it’, as he proudly informed his cousin George Byron. (E. L.)

1800年の夏休み(12才)をノッティンガムとニューステッド・アベイに過ごし、いとこのマーガレット・パーカーに恋をして、詩人にとっての詩心<sup>うたごころ</sup>がはっきりと芽生えてくる。

マーガレットは詩人にとって 虹の如く、はかなく消えた束の間の 透明な美しさとして いつまでも忘れられない 存在となった。

1802年、マーガレットは 肺をやんで 死に、ときに詩人は 14才の多感なハロー校在学中であった。教会の墓地で、追憶にふけることも多く、幼くして‘死の世界’を深く考えるようになった。はかなく散った、だが鮮烈な——死に引き裂かれた——恋であった。透明なこの愛に幼くして 死を考えた 詩人の魂に、死地を、崇高なギリシャ独立戦争に身を投じた、あの計画された生涯を予知した人間バイロンの、ルーツをここに探ることも できるであろう。

Today it is equally hard to conceive of the deference paid by masters to schoolboys of rank, and the ruffianly behaviour of schoolboys towards one another. At the Aberdeen Crammar School Byron's pe-erage had been announced by the Head over congratulatory wine and

cake. Dr. Drury, headmaster of Harrow, made a special point of drawing out the spirited but shy young lord — ‘a mountain colt’, as he called him, who could be led if at all only by ‘a silken string’. There was nothing silken in the attitude of Byron’s schoolfellows. They would have ridiculed his deformity but for his own effective resort to fisticuffs. Soon it was he who protected boys less bellicose than himself by ‘licking’ or ‘thrashing’ their bullies. (E. L.)

‘絹紐<sup>ひも</sup>にひかれてゆく高原<sup>コルト</sup>の仔馬’。少年バイロン卿へ、ハローの校長 Dr. Drury は絶大な讃辞を呈した。しかし——

小バイロンは‘絹の仔馬’どころか、‘けんかバイロン’として 悪童連の尊敬の的として英雄視された存在であった。

跛のバイロンよ！ とでも嘲笑されたら……彼のゲンコの雨がふる。弱い者いじめをする奴は 徹底的にうちのめした、弱い者を庇護した 正義漢として悪童連には、怖れられた存在であった。ハロー時代、生れながらの雄弁家としての名声をはせ、吠える、行動する熱血詩人バイロンの芽生え がすでに……。

後任の校長 Dr. Butler に対しては、しかし、異常に反抗的であり、教室をこわし、校長宿舍の鉄格子をぶちこわすなど、新校長排斥運動の陣頭にたつが、それは、1807年出版の“Poems on Various Occasions”の中で、“Childish Recollections”に回想している。叛逆詩人としての萌芽がすでに……。

1803年夏休み、隣家の遠戚<sup>せき</sup>にあたる——メアリー・アン・チョーワースの美しさにひかれすっかり恋のとりこになる。

彼女には すでに 婚約者あり、まったく片想いであり、また、“あんな跛の子に、私が すこしでも想い<sup>おも</sup>をかけるとでもおもって？”と彼女が 女中に話しかけるのを もれ聞いて、少年バイロンは“心臓への一撃”のようなショックを受けた。そして、失った恋のこの極致は、——チョーワースとの交情は

その後、つづきはしたものの——詩人バイロンの深き傷手として拭<sup>ぬぐ</sup>いがたい、暗い憂愁の蔭を終生 ながてゆく。チャーワースは詩人にとって‘できうるならば妻としたかった理想の女性’であっただけに……(蟲惑<sup>こわく</sup>的チャーワースへの美しさを恋う歌は、後述、ケムブリッジ 編の中で)。失意のどん底に投げつけられ、彼は一学期間、ハローを長期欠席する。

1804年1月、ハローに復学、——そして、波乱に富んだ少年期ハロー時代に訣別する。

数奇な運命に翻<sup>ほんろう</sup>弄された詩人の生い立ちは静止することなく、揺さぶりつづけられたが——そのような星のもとに生れ出て、転々として幼少期に居を移さねばならなかったことは、ひとつには、教育に異常な熱情を示した詩人の母親キャサリンの行動的性格の故でもある。が、18世紀～19世紀の動乱の時代を、その縮図の如き幼少期を過した詩人が、あまりにも多すぎる経験を味わったことに 後年の矛盾の詩人バイロンが、すでに創<sup>は</sup>られ<sup>て</sup>しま<sup>っ</sup>た<sup>た</sup>と考えられるほど——それほど、‘二つのバイロン’のルーツをここに探ることができるであろう。

そして詩人は 1805年10月、Cambridge の Trinity College に入る。そして——

さらに、揺れに揺れ、荒れ狂う、詩人の青春、嵐の青春へと突入してゆく。  
ときに、詩人17才。(未完、次稿へ)

#### (付記)

この拙稿の主題を究めるにあたり、Longford 伯爵夫人の、名著‘バイロン’を偶々オックスフォードで入手して、適格な背景的考証が得られたことを僥倖として、貴重な参考資料の提供に深謝する。

#### 参考文献

- 1) Elizabeth Longford: Byron, Hutehinson
- 2) Ernst Hartley Colevidge: The Poetical Works of Lord Byron. Lewis Prints
- 3) Fraucis M. Doherty: Byron. Evans,
- 4) Leslie A. Marchand: Byron's Poetry. Gohn Murray
- 5) Herbert Read: Byron.